

知覚動詞における多義構造の重層モデル化： 伴う行動と概念操作の観点から

高嶋 由布子

京都大学大学院 人間・環境学研究科 takashima@hi.h.kyoto-u.ac.jp

本稿では、認知言語学の観点から知覚動詞の多義構造を扱い、知覚動詞の複数の語義の構造が、身体的運動、知覚、概念操作の三層が重なり合うモデルで表示できることを提示する。知覚動詞は、基本的には〈知覚〉という心的活動を意味するものである。また、これは意味拡張して伴う行動や概念的な情報処理までを指示して使われる。このとき現実では、知覚に伴う身体行動と、知覚、概念操作という三つの層での活動は、同時並行的に起ることが示唆されるが、語においては語義としてメトニミー的に含意され、表現の文脈によって一定の認知的際立ちをもって解釈されることも示唆される。

1.はじめに

本稿では、知覚動詞の多義構造をモデル化して観察することから、言語の意味における〈知覚〉の地位を検討する。

寺村(1982)は、知覚すなわち「見たり、聞いたりするいわゆる五官の発動」を、言う、話すという発話活動とともに、「外界の情報、現象を捕捉して脳に伝える働き」で、「外的活動と内的活動の中間にある」としていた。しかし、知覚動詞の意味拡張・多義構造を考察することはなかった。本稿は寺村のこの位置づけを踏襲しながら、語の多義構造を記述しようとするものである。

2.従来の多義の記述

従来、語の多義の記述においては、語義を列挙する国語辞典的なもののほか、認知言語学のパラダイムでは、メタファーやメトニミーに基づいて語義を構造化して、ネットワークを描くもの、イメージ・スキーマで図示するものなどがある。

初山(2001: 32)は、多義語分析の課題として以下の四点を挙げている。

- (i) 複数の意味の認定
- (ii) プロトタイプの意味の認定
- (iii) 複数の意味の相互関係の明示
- (iv) 複数の意味すべてを統括するモデル・枠組みの解明

このとき、従来の方法では、(iii)(iv)に関して、事物・概念の類似性に基づいたメタファーや、事物の隣接性、関連性に基づいたメトニミーなどを説明原理として語義の意味のネットワークを描いていた。

また、国広(1997)は現象素という概念を用いて多義を説明した。現象素とは、「語の用法と結びついた外界の現象・出来事・物・動作など、感覚で捉えることができるもので、言語外に人間の認知の対象として認められるもの」であり、ここで生じる多義は「認知的多義」であり、これは現象素の「認知の違いが主な原因で生じる」としていた。この「認知の仕方の違い」はメトニミーを生み出す原理ともいえ、本研究とも根を同じくするものであるが、このとき〈知覚〉の地位は、あきらかにされていない。

語義を認定し、メタファー、メトニミーの観点から知覚動詞の「みる」を研究したものに田中(1996)があるが、これも〈知覚〉(寺村のいう中間にあるもの)と〈概念〉(内的活動)の地位の差を明確にしたものではなかった。このため、語義を、メタファーやメトニミーでつないだだけになってしまった。

しかし、知覚は、〈外界〉に属する身体運動的なものと〈内的〉で心的なものの中で、人間の行動において、ある一定の地位を占めるものであるた

め、どの立場から表現されているかを観察して
みる必要がある。というのも、「見る」や「聞く」など
は、使用頻度が高い多義的な動詞であり、これに
対しては、メタファー・メトニミーといった観点
だけでは、説明しきれない部分が多い。また、よ
り妥当な記述ができることによって、〈知覚〉の地
位を明らかにできることも期待できるため、以下
で検討を重ねていく。

3.本研究での観点

身体経験を基盤とする認知意味論の立場から、
この知覚の地位を確定することをまず試みたい。
このなかで Lakoff & Johnson(1999)における身体
に関する考察では、知覚は、身体的な運動と、心
的・概念的操作の中間にあることが示唆される。
認知意味論では基本的に、身体的な運動の経験の
反復によって形成されたイメージ・スキーマとい
う構造によって、より抽象的な概念は解釈される
という考え方だが、知覚はこの中間に位置してい
る。よって、身体運動から知覚への構造のメタフ
ァー的投射と、知覚から概念への投射があると解
釈できる。

ここで語の意味を拡張する「メタファー」の原理
は、Lakoff(1993)の主張に基づくと、表現上ではな
く、概念上の問題であり、Lakoffは「メタファーは
概念領域間の写像」であり、「写像は恣意的なもの
ではなく、身体や日常的な経験・知識に根ざしてい
る」ものであることから、「メタファーは類似性よ
りも、経験における対応関係に基づいている場合
が多い」ということを指摘している。つまり、メ
タファー的写像の原理は、日々の一連の行動の経
験の流れに基づいているメトニミーであることも
ある。

本稿では語義の分析に際しても、この「メタフ
ァー的」と思われるもの「メトニミー的」と思われる
ものを、認知領域間の対応関係として捉えて、整
理することができないか、という点に着目した。

〈知覚〉の地位を確定するにあたっては、心理
的な部分の考慮が必要である。

国広の現象素の定義は、心理的・概念的な意味
を中心に持つ動詞に関しては不十分であるが、し

かし、「認知の違い」が主な原因で多義が生まれる
という観点は有用であり、〈知覚〉をどのように認
知しているかという観点で

ここで、より具体的なものから抽象的なものへ
という主観化の観点だけでなく、行動のスクリプ
ト(流れ、LakoffのICM、フレームのようなもの)
の観点を導入する。また、具体的に「感覚で捉える
ことのできるもの」として、身体動作としての〈知
覚〉も考慮に入れる。

4.分析

ここでは基本的に「(N1が)N2を見る」という
構文を中心に観察していくが、N1の部分は、人
であり「私」や「彼」でさほど意味に差がないと思わ
れるので、N2に基づいて観察を進める。

〈知覚〉

国語辞典でも、先行研究(田中、寺村)でも、
以下(1)のような知覚の意味を基本義とすること
に異論はない。N2には視覚対象である外界の事物
が入る。このとき、知覚というのは、見たものを
そのものに分類し認識したという「〜として見る」
という意味を内包している。これは、何かを見た
ときに「〜である」とする〈暗黙の判断〉である。

(1) {コップ/山} を見る

(2) {陽炎/残像} を見る

また、(2)のように物理的実体がないものもまた、
視界において見えを提供し「〜として見る」対象
であるから、知覚に分類できる。

〈他者から見える行動の「見る」〉

因果的に「見る」ことには「目を向ける」行動が伴
う。このとき、「知覚する」こと以上に、「目を向け
ている」ことが表現の中で含意されることがある。

(3) {左/後ろ/遠方/近く} を見る

このとき、ヲ格をとる名詞は〈場所〉であるが、
場所を「〈場所〉として見」ているわけではなく、
ここでは知覚の成立より、その方向に注意してお
り、その方向を向いていることが意味的に際立っ
ている。「左を見る」などは、〈左を向く〉という
身体運動の意味も伴っており、以下のような場合

は、注意して目を向けることが意味の中心だが、必然的に、首を左に向けることも命令することになる。

(4)左を見て！

また、ヲ格をとる名詞が、(5a)のように見て回る必要のある場所の場合、歩いて〈見て回る〉ことを文脈から読み取れるが、そのような文脈がない場所(5b)の場合は、遠巻きに〈眺める〉意味のほうを読み取れる。

(5)a. {美術館/バーゲン会場/展示会} を見る

b. {廃墟/空き地} を見る

(6)a. 小屋の前に踏み切り番が立って駅のほうを見ていた (新潮 100)

≠b. 踏み切り番には駅のほうが見えていた

また、(6a)のような場合は、「見る」ことに「見える」という視知覚が伴っていることだけでなく、他者から見たときに「見ている」という状況のほうに意味の中心がある。ゆえに(6b)の含意はあるにしても、言い換えることはできない。

これは、監視の意味へ拡張する。(7)に示すように対象が人間だった場合、監視や世話、これが、対象がものになると、対処・管理の意味になる。

(7)a. {子供/病人} {φ/の面倒} を見る

b. {荷物/鍋} を見ておいてね

〈視知覚と概念的な処理〉

(8)a. 書類を見た

b. 例の書類、見なかった？

c. 例の書類、見てくれた？

書類など概念的な情報を含むものは、(8b)のようにモノとしての側面をただ「知覚」するだけか、あるいは、(8c)で含意されるように情報を獲得してなにか概念的な処理を施す(思考・検討・判断)かどちらかの意味になる。「見る」は文字情報だけを入手する意味では使えない。これは「書類を読む」と「書類を見る」では内容が違うことから示される。

〈概念的な処理〉

ここで、対象が外界で物理的な実体や客観的な事象としての地位を持たず、より概念的で主観的

な判断を含むものである場合を以下に挙げる。これらは、ヲ格の名詞が、(9)(10)aのように程度を表すものだった場合観察や検討の意味になるが、度合いを表す(9b)のような場合は、判断の意味になる。(9)(10)aの場合は、「見る」行為を、(9)(10)bの場合は「見た」結果からのメタファーとして捉えることもできる。

(9)a. 病状の進行具合を見る〈診断＝観察，検討〉

b. 病状の悪化を見る〈判断〉

(10)a. プレゼントで人柄を見た〈観察，検討〉

b. プレゼントに人柄の良さを見た〈判断〉

また、(11)から観察されることは、判断や対処ができる人が見るか、そうでないかで含意の差が表れるということである。対処ができる人が「見る」場合は、検討や判断を伴い、場合によっては対処までを含意するが、対処ができない人が「見る」場合は、(11b)のようにただ物として知覚する意味になるか、(12b)のように物でない場合は容認性が低下するということが起こる。

(11)a. 先生が答案を見る

b. 生徒が答案を見る

(12)a. {調律師/ピアニスト} がピアノの音を見る

b. ??子供がピアノの音を見る

〈情報の受容→経験〉

(13a)のように、「見る」ことで「選ぶ」ことまでを含意することもあれば、(13b)(14)のように、偶然見かける、という意味も同じ「見る」で表される。

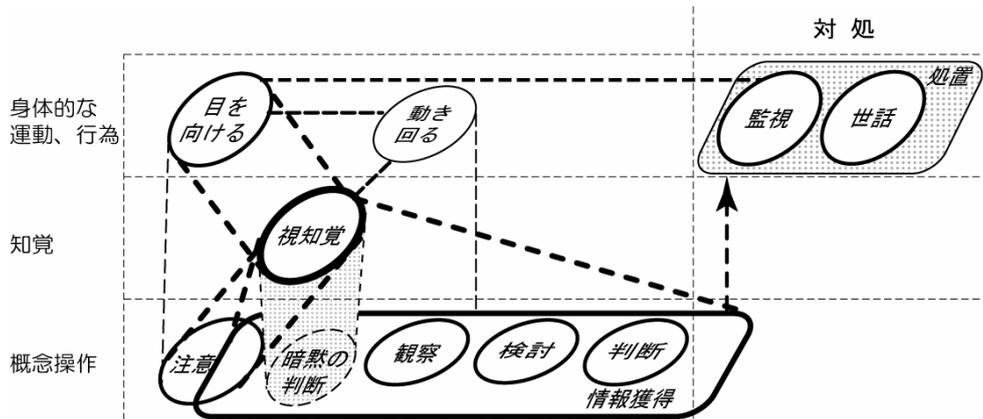
(13)a. 引き出物にウエッジウッドのお皿を見た

b. ガラクタ市でウエッジウッドのお皿を見た

(14) 犯人を見た人がいる

意図性が低く、偶発的に見る情報獲得のような情報の単なる受容は、以下(14)のような、非意図的な情報(経験)の受容に拡張しているように思われる。

(15) 痛い目を見る



5. 多義構造

以上で観察してきたように、「見る」の語義は、情報を獲得しただけ、情報を得た上で、検討を加え、判断をするなどさまざまなレベルがあり、これらは文脈から解釈される。また、おのおのの意味は、ばらばらではなく、一定のSCRIPTであることが見て取れる。このSCRIPTをただ一本の流れで描くのではなく、「身体的な運動」「知覚」「概念操作」の三層に切り分けて表示することを試みた。これを上図に提示する。

このとき、視知覚には、必ず「目を向ける」ことが伴っている（目をつぶってモノを見ることはできない）ので、運動と知覚の層は切り離すことができないが、解釈の際にどちらに際立ちがあるかは、先に見たように一定ではない。

また、監視や処置は、判断を経た後でしか意味を持たない(11)。注意を伴わない偶然の情報獲得（犯人）もある。このとき、「書類を見る」などは、知覚と概念操作が同時に起こっているが、概念操作の層だけが切り離されて意味することがあり、これがメタファーに基づく語義拡張である。これは同時に主観化であることも示すことができる。

6. 考察と発展

語の意味を記述するにあたり、必然的に伴う行動と、行動のあるべき流れ（SCRIPT）を、図示するにあたって三層に分けたモデルを提示した。知覚や思考・概念での情報処理のようなものは、行動に伴って同時並行的に行われている。これは語の意味の中ではメトニミー的に含意され、文脈によっては、部分的に際立ちを持って解釈される。

これらは、語の意味としては、一続きのSCRIPT

として描くことも可能であったが、同時並行的に進んでいるものとして、二つの層の中間に知覚を描いた三層モデルにした。この意義は、概念メタファー理論の知覚の位置づけを踏襲した点にもある。

また、この三層モデルを用いて視知覚の自動詞「見える」を描くと、身体・運動の層で際立つ意味はなくなり、より心理的な意味を示すことがわかる。これは、「{私/彼}には～が見える」など自動詞と他動詞の非対称性の根拠も示唆する。このほかに、聴覚の知覚の「聞く」では、他者から見える運動としての意味はなくなるが、他者から見える行動としての「問う」という意味の「訊く」が現れたりする。この整理法は「見る」以外の知覚にまつわる動詞の分析に一定の効果を発揮することが期待される。

[参考文献]

- Lakoff, George. (1993). "The Contemporary Theory of Metaphor." in Andrew Ortony (ed.) *Metaphor and Thought (2nd edition)*, pp.202-251, New York: The Cambridge University Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson. (1999). *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.
- 国広哲弥(1997). 『理想の国語辞典』, 大修館書店.
- 田中聡子 (1996). 「動詞「みる」の多義構造」, 『言語研究』, Vol.110, pp120-142.
- 寺村秀夫 (1982). 『日本語のシンタクスと意味 第I巻』, くろしお出版.
- 初山洋介(2001)「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喻」, 山梨ほか(編)『認知言語学論考』 No.1, ひつじ書房.